# 波紋

## 自転車の安全運転を周知して！

茨城県土浦市　佐藤　敏子

今月から改正道路交通法が施行され、自転車の悪質運転に対し、罰則が強化された。

信号無視や酒酔い運転など14項目の悪質運転危険行為で複数回摘発されると、自転車運転者講習の受講が義務付けられるということだ。

何年か前、主人と孫が道路を歩いていた時、脇道からふらふらと出てきた自転車が、車道に横転したという。自転車に乗っていた壮年は、かなりお酒を飲んでいたようだが、幸い、自動車がその人をはねるという重大事故にはならなかった。

スマートフォンを操作しながらや、傘を差しての自転車運転も多く見かける。自転車は車と同じ左側を走るはずなのに、走っている車に向かってくる自転車も多い。

罰則強化も大事だと思うが、警察の取り締まりを含めて、教育現場や地域ぐるみで安全運転の指導の充実が不可欠だろう。

自転車の安全運転への意識の高まりが事故を防ぐことになると思う。

（主婦　66歳）

## 都会で見つけたツバメの巣

東京都新宿区　奥山　君代

最近、都会のど真ん中にツバメの巣を見つけて感動でいっぱいになった。

近年では、都心部を中心になかなか見られない光景だ。しかも塀の隙間を利用して、器用に巣を作っている。

ツバメは泥などで巣を作ると聞いて、そのたくましさに生きる力をもらった。

何かギスギスして暗いニュースも多い今の世相の中で、ツバメが巣に帰る時のさえずりを聞いて何かホッとさせられるのは、私だけではないと思う。

無事に卵がふ化し、ツバメのヒナが天敵にやられないで、ちゃんとひとりだちできるように、祈る思いだ。

その思いを糧にして、これからの生活を充実していきたい。

（主婦　65歳）

## 模擬選挙で若者の政治意識向上

東京都大田区　谷合　慶子

今回の統一地方選では、投票率下落の歯止めがかからず過去最低を記録したとのこと。

中でも20代の投票率がシルバー世代を大幅に下回りました。早ければ来年の参院選から「18歳選挙権」が実施される見通しになっています。若者の意見をもっと政治に反映していく意味でも政治に関心をもてる取り組みが必要だと感じます。

長く英国に住んでいる友人から、英国をはじめ欧米では、選挙権を得る前に学校などで模擬選挙（模擬投票）が活発に行われていると聞きました。中には、実際の選挙を意識して、実在の政党が載った投票用紙を用いて模擬投票を展開したり、実際の選挙の候補者たちを招き、生徒たちと討論会を開催することもあるようです。

日本では、議会や選挙の概念を学ぶことはあっても政党や候補者を選ぶプロセスを学ぶことはほとんどありません。政治的中立に配慮しながらも模擬選挙を体験することで、若者の社会や政治に対する意識を高めることにつながるのではないかと思いました。日本でも若者が主体的に政治参加できる取り組みを検討してほしいと思います。（主婦　58歳）

## 議員はSNSの積極活用を

さいたま市南区　小野寺　益男

現在、フェイスブックやツイッターなどのSNS（ソーシャル・ネットワーキング・サービス）を多くの人たちが利用しています。

先の統一地方選でも多くの候補が選挙運動ツールとして大いに活用していました。そこでは、日頃の活動を紹介するなど日々頑張っている様子も伺えたので、応援する側が見ても楽しい限りでした。

しかし、投稿された方の中には、選挙が終わった途端、投稿や発信を全くせず、更新されないで放置状態になっている方が少なからず見受けられたことは残念な気がします。

選挙に限らず、多くの方が気軽に使えるツールですが、使い方次第で効果がプラスにもマイナスにもなることを再認識しました。私も他山の石にしようと思いました。（会社員　53歳）

東京都板橋区　斉藤　タカ

## 日本地図を学び直し、苦手克服

大阪府東大阪市　堀内　貴美子

学生時代は国語、社会科が苦手で、興味のないことは覚えようともしなかった。高校卒業後、看護師をめざして猛勉強。やがて、正式に看護師資格を取得。学生指導や師長も経験した30年余の看護師時代は私の誇りだ。

だが、投稿を始めた最近になって、自分の苦手な面が気になりだした。そして、あれほど関心のなかった地名に興味を感じだした。分からない県名を夫に聞くこともある。「小学生からやり直しだな」との夫の言葉にも、「ごもっとも」と腹が立たない。

そんな私に先日、夫が大きな日本地図を買ってきてくれた。必死に地図を見る私の様子に夫は笑っているが、私は感謝している。県名を覚えた後は何に挑戦しようかと思う。

自分の苦手な面をさらけ出し、何歳でもありのままで、恥ずかしがらずに学ぶことは楽しい。（主婦　58歳）

■次の特集テーマ■

**私だけの記念日**

6月30日消印分で締め切り

▶次のテーマは「私だけの記念日」。ささいなことでも大切にしている日があるはず。そんな記念日を、エピソードを添えてお寄せください

▶字数は400字程度。郵便番号、住所、氏名、年齢、職業、電話番号を明記。原稿は添削する場合があります。掲載分には薄謝を進呈します

送付先　郵　送：〒160-8521 公明新聞波紋特集係
ＦＡＸ：03(3225)0230
メール：hamon@komei.jp

# 「江戸」に学ぶ3・11復興の知恵

東日本大震災からの復興や防災を歴史の視点から考えるトークセッションが5月22日に仙台市内で開催された（主催・法政大学宮城県校友会）。東北大学災害科学国際研究所の前所長で宮城学院女子大学学長の平川新氏が、江戸時代に学ぶ震災復興などについて歴史論を展開。一方、法政大学の田中優子総長が、江戸時代と現代のコミュニティーに着目した比較文化論を繰り広げた。両氏の発言要旨を紹介する。（文責・東日本大震災取材班　峠淳次、川又哲也）

**法政大学宮城県校友会主催「トークセッション in 仙台」から**

宮城学院女子大学　**平川　新**　学長

ひらかわ・あらた　1950年福岡県生まれ。法政大学卒、東北大学大学院文学研究科修士課程修了。東北大学災害科学国際研究所の初代所長などを経て、昨年から現職。専攻は江戸時代史、歴史資料保全学。著書に『開国への道』など。

## 東北の復元力、歴史が証明

東日本大震災は「1000年に一度の大災害」と言われる。平安時代前期の貞観11年（869年）に発生した「貞観地震」いらいの巨大地震というわけだ。

だが実は、3・11クラスの地震と津波は江戸時代初期の慶長年間（1596～1615年）にも数次にわたって起こっている。「慶長大地震」だ。3・11後、地層の津波堆積物や過去の文献を改めて分析・調査する中で、想像以上の規模だったことが判明しつつある。

とりわけ、三陸沖を震源とした「慶長三陸地震」では、仙台の沿岸地帯だけで180〇人の溺死者が出たと仙台藩の記録にある。福島から青森までの間で5000人ほどが犠牲となったと見られる。

この歴史的事実は重要だ。私たちが暮らすこの日本列島にあっては、巨大地震と大津波は「1000年サイクル」などではなく、「数百年サイクル」でやって来ることを教えているからだ。ちなみに言えば、「死者が出る規模」の地震・津波は57年に1回、「建物が流される規模」のものは20数年に1回の頻度で起きている。日頃の防災対策がいかに大切かを自覚したい。

＊

仙台市若林区に「浪分神社」と呼ばれる社がある。津波の浸水域との境目に建てられたと伝わるが、今、その名が付いた時期をめぐって一つの伝説が生まれようとしている。いわく、「慶長の大津波に由来する」「いや、貞観の津波の際に付いたのだ」と。

だが、「浪分」の名が実際に付いたのは明治以降。江戸時代の記録には単に「稲荷神社」としか記されていない。つまり、今回の大震災を経験して、地元の人々が〝新たな伝承〟をつくりつつあるのだ。この点は非常に面白いところで、伝説・伝承がどのようにして生まれるかを私たちは今、目の当たりにしている。教訓を伝えようとする「庶民の知恵」の逞しさを思わないわけにはいかない。

＊

江戸時代にも、今でいうハザードマップのようなものがあった。それらを見ると、当時の人々がいかに防災・減災に気を使っていたかが分かる。例えば、海岸・川沿いには意識的に家が造られていない。宿場や主要街道も巧みに浸水域を避けている。事実、これらの場所を3・11の津波被害マップに重ねると、どの場所も浸水域からぎりぎりのところで外れている。

どうやら、通常の政策と手法で危険度を下げるという知恵は、現代人より先人の方が優れていたようだ。「堤防を建てたから安心」などといった過信はなかった。

＊

震災復興についても、「江戸」から学ぶことは多い。例えば慶長大震災の際、仙台藩は津波に襲われた沿岸地帯の新田開発のため、入植者を年貢を免除して募集している。

## 巨大地震　数百年サイクルで発生

法政大学　**田中　優子**　総長

たなか・ゆうこ　1952年神奈川県生まれ。法政大学卒、同大学大学院人文科学研究科博士課程単位取得満期退学。同大社会学部長などを経て、昨年から現職。専攻は江戸時代の文学・生活文化、アジア比較文化。著書に『江戸百夢』など。

「江戸文化」を地震という視点から見ると、「元禄の大地震」（1703年）と「安政の大地震」（1855年）に挟まれた時期に育ったということができる。

元禄の大地震の記録は、それほど多く残っていないが、新井白石が『折たく柴の記』で被災体験をつづっている。

湯島に住んでいた白石は、震災後、何者かが「火事が起きるから火を消せ」と叫びながら歩いていたことを記録している。白石が、地震が起きてすぐにしたことは①家族を家の中から避難させ、庭に置いた外した戸板の上に座らせた②大事な書類を土の中に埋めた――の2点。この行動から、家屋の倒壊と火災、地割れを想定していたことが分かる。

「元禄」の年号は、大地震を契機に「宝永」と改められた。当時は、災害など不吉なことがあると年号を変えていたのだ。なお、元禄の大地震の4年後、東海道沖から南海道沖の南海トラフという広い範囲を震源とする宝永地震が発生し、その49日後には、富士山の「宝永大噴火」が起きている。

＊

安政の大地震は、瓦版が発達していたため記録が豊富に残っている。いわば〝瓦版新聞記者〟が被災地へと取材に赴き、文章と絵図で報道していたのだ。この時代に「災害報道」が確立されていたことが分かる。震災直後は、火災に注目して、発生場所や規模が報道されている。

瓦版は、震災後の避難生活も伝えている。今でいう「避難所」や「仮設住宅」の暮らしだ。住民が力を合わせて、倒壊した家から、ふすまや障子を外して仮家を建て、火鉢を持ち込んで料理をして食事をするなど、興味深い内容が記されている。

下級武士が自宅から米を持ち出し、「炊き出し」をして、おにぎりを振る舞う。しかし、米はすぐになくなってしまう。食べ物のない避難者のために飯屋の主人に粘り強く交渉し、食事を提供させた。そんな「物語」の描写もある。

こうした〝瓦版報道〟を見ると、江戸の人々は災害が起きた時には、「自分たちで何とかしなければならない」「困った時は助け合おう」と、今でいう「自助」や「共助」のような考え方を持っていたことが想像できる。

＊

火災の多発に伴い、消防組織も整備された。藩邸が江戸に集中していたことから、大名火消や幕府直轄で旗本が担当した定火消の組織ができあがった。やがて町人による町火消が組織化され、48組にまで発展した。

当時の消火方法の主力は、水よりも、建物を壊し、延焼を防ぐ「破壊消火」だった。そのため、町火消で一番力を発揮したのは鳶職人で、頭になることも多かった。

消火活動では、どこかの家を取り壊す必要があるが、むやみに壊すこともできない。

地震、津波だけではない。東北地方はヤマセによる冷害で凶作がたびたび起こる。天保の大飢饉（1833～39年）では何万、何十万人も餓死したほどだ。

だが、そうした大ダメージのあとには、逆境を逆手に必ず地域の産業を災害前以上の状態に復興させている。コメだけの農業から多様な農作物を栽培する農業へ、さらには農作物に付加価値を付け商品化するといった具合に。今に残る東北の名産物には、そうした過程で生まれたものが少なくない。リスク・マネジメントがきちんとなされていたということだろう。

歴史が証明するこの「東北の復元力」こそ、3・11からの復興への希望だ。事実、被災地を訪ねると、それぞれの分野でリーダーが次々と出ていて感激する。〝普通の人〟が自覚的、自発的に復興をリードしている。未曽有の災害にも私が復興を確信してやまないゆえんがここにある。

## 「つながり」こそ防災の基本

### 江戸の町　息づいていた自助・共助

東日本大震災の発生後、避難所で炊き出しをする住民たち＝岩手・宮古市

そこで普段から地域で頼られている頭が調整にあたる。住民も「あの頭から言われるのなら仕方ない」と協力する。互いを信頼し合いながら、コミュニティー全体で災害に立ち向かったのが江戸である。

＊

東日本大震災で、宮城県南三陸町歌津の馬場中山地区は、救援物資が届かない孤立集落となった。自分たちの食料や物資を持ち寄って、公民館や自宅で避難生活を続けた。インターネットを使って全国のボランティアと連携し、食料やトイレや風呂を手に入れ、宿泊施設や道路まで完成させた。復興に必要な知恵と物資を自ら集めたという。

そこには、地域で住民が支え合う江戸時代のような「集落の力」が息づいていた。「人とのつながり」こそが防災対策の基本であることは、江戸期も今も、そして未来も変わらない。